OUT-LINE　　'68. 4

社会科学研究会（略称 社研）は　現在２つの研究Ｃ（コース）を持って研究活動を展開しています。私達は　思想ガー自の人格の内で形成されて行くモメントを加味に置えし（例えば、入門Ｃとして初期マルクス etc を順番に読むという事の矛盾性をみよ）頭の中で〈自己変革〉のごとき事を行っていく奇形的な〈研究〉を拒否し　一人一人が個々のインディヴィジュアルな問題を　如何にして普遍的な課題として形成し得るかという地点に立って　自立した研究活動を行っていく。それ故　私達は　理論的〈指導↔被指導〉の関係や　代表の論理を自覚化しながら峻別していく作業を　現実的な対象との緊張関係の内で不断に続けて行く。

季節はすでに終りであった

「結果と展望」

社研の新しいサークル誌！

増刷版　20円

「森川義信詩集」

海賊版　10円

その他　毎月２回程　社研ニュース発行。

社研会員募集!!

時代に真向から立向い
吃立した奈落の淵に
にじり寄る執念
日本近代の矛盾の
根底的止揚に挑む

〈連絡先〉

[redacted]

第1学館　26号室

第二学館闘争を　第決早大闘争への突破口とせよ!!
全國学園闘争勝利!
学生政治犯の即時釈放!

早大　社研闘争委員会

アピール

早稲田大學　社会科学研究会

キャンパスに咲き荒れるタテ看の春一番は、おまえに政治の季節の到来を告げただろうか。かまびすしいアジテーター達の絶叫は、ホットな気配を運んだだろうか。俺の心は、今、冬のように閉じたまま。否とつぶやいている。おまえの頬と同じに俺の頬も白く凍ついた怠惰の歴史しか背負っていないが、俺は格好づけ思考喫茶屋や、ボン引きがりのサークル活動家の下手糞な動揺に眼をキョロ・キョロさせているお前にチョット心配しているのだ。

おまえは自分の立っている地で考えればよいのだ。俺達の前に立っている空虚の深さを測ればよいのだ。

俺は"何もやる事がない"という（自然な）自己認識から出発する。何かやることがある人達が、忙せわしく俺達の前を通って行く。季節のように生き、季節のように死ぬ人達が。以等にとって〈情況〉は自分と殆んど重なる程親和であり、〈革命〉や〈叛逆〉や〈青春〉や……全ての言葉が春風のように頬をかすめていく。嘘だ！　すでに裏切りを感づいているおまえはそう叫ぶだろう。俺達にとって言葉は全て嘘だから（叛逆は叛逆と名づけた瞬間、そうでなくなるから）俺は自分の沈黙の記憶を大切にしようと思う。

"話せばわかる"という擬制が俺達の内部から消えたのは、もう遠い昔のことだったろうか。飛ぼうとして飛べない貧弱な肉体しか持たなくても、そこでしか勝負は決まらないのだという事が、今俺にはハッキリと判っている。伝達を前提とするどの様な共同性も俺に用はない。俺にとって、そしておまえにとっても現在必要なのは、沈黙において伝達し、非和解的な対立と自己運動によってかろうじて成立する危機のような共同性だけではないだろうか。俺達はひょっとすると、薬くやせ細って倒れるかも知れない。しかし、その様に級っていく以外に俺達の空虚の扉うに出る道があるとは思わないのだ。

もちろん俺は問う。決算表明や責任一致や説得な綺麗ごとが行きつけない所で躓くために、〈階級〉や〈資本〉の論理が肉体の痛みに転化する地点を見究めるために。そして何よりも、俺自身のために俺は自分のやりたい闘争をやるのだ。

自分のどうしようもない面に沿って上昇する潮行の旅へおまえを招待しようかと、俺はちょっと迷っているのだ。多分、それ程カッコよくもないし、むしろ苦しい緊張の持続しかないだろうから。もちろん、もうここから先は、おまえが決断すればよいことだ。

（文責 [redacted]）